

リヒャルト・シュトラウスと双璧を成したオペラ作家
フランツ・シュレーカーのオペラ、日本初の舞台上演！

CHRISTOPHORUS

oder

„Die Vision einer Oper“

クリストフォロス、
あるいは「あるオペラの幻影」

日本初演(ドイツ語上演・字幕付) / 台本・作曲：フランツ・シュレーカー

会場：清瀬けやきホール

日程：2024年6月22日(土)・23日(日) 14時開演

料金：全自由席 8,000円

◆プレイベント◆

会場：大泉学園ゆめりあホール

日程：6月2日(日) 19時開演

出演：佐久間龍也(指揮)、館亜里沙(演出)、
田辺とおる(公演監督・解説)、歌手数名(調整中)

料金：1,000円(公演チケットをお持ちの方・受付で購入される方は無料)

内容：シュレーカー、およびオペラ《クリストフォロス》についての解説、
指揮・演出家・歌手によるトークセッション、抜粋演奏など。



指揮：佐久間龍也



演出：館 亜里沙

6月22日

6月23日

6月22日

6月23日

6月22日

6月23日

アンゼルム



羽山晃生



芹澤佳通

ハインリッヒ



上田 駆



金子快聖

リーザの侍女エッタ



中尾 梓(両日)

リーザ



津山 恵



宮部小牧

フレデリック



金子快聖



上田 駆

ピアニスト
(第2幕は連弾)



小林 遼



波木井翔

クリストフ



石崎秀和



高橋宏典

アマンドゥス



西條秀都



長島有葵乃

ホテル《モンマルトル》の客(両日)

小野寺礼奈

小林愛侑

小林万佑子

西脇紫恵

ロジータ



武井涼子



塙 梨華

エルンスト



長島有葵乃



西條秀都

オーケストラ (両日)

エレクトーン



山木亜美



柿崎俊也

ヨハン先生



田辺とおる



岡部 一朗

子供



都筑夕姫菜



長嶋穂乃香

コンサートミストレス



三戸素子

シュタルクマン



岡部 一朗



田辺とおる

ハルトゥング
博士/司会者



ヨズア・バルチュ



ダニエル・ケルン

霊媒
フロランス



原夏海



大澤桃佳

カルダーニ
神父



ダニエル・ケルン



ヨズア・バルチュ

弦楽合奏



クライネス・コンツェルトハウス

シュレーカーは、R.シュトラウスが《薔薇の騎士》などを書いた1910年代に、三大オペラと呼ばれる《遙かなる響き》《烙印を押された者たち》《宝掘り人》を完成させ、当時のオペラ作曲家で唯一、シュトラウスに並ぶ公演回数を誇りました。1920年にはベルリン音楽大学学長に就任し、作曲教授として多くの逸材を育てましたが、強まるナチスの圧力と急激な作曲様式の変化という荒波に翻弄されて、自身の新作は前作ほどの評価に届かなくなりました。

この作品は、このような境遇にシュレーカーが放った抵抗の一矢です。作曲家である主人公には、彼自身の音楽観を語らせません。そしてバロックから後期ロマン派に至る伝統的な音楽や、ウィーンの前衛的な音楽様式からキャバレー音楽までを縦横無尽に融合させ、さらにフロイトの精神分析とヴァイニングァーのジェンダー論まで盛り込んだ実験作です。しかし極めて官能的で美しい音楽と、コミカルな芝居によって、作品の全容は上質の娯楽に仕上がっています。

1933年に予定された初演は、ナチスが同年1月に政権に就いたことによりキャンセルされました。シュレーカーは公職を追われ、秋には脳梗塞に倒れて翌年3月、56歳の誕生日目前に亡くなります。この曲は唯一、みずから観ることの叶わなかった自作オペラとなりました。1978年にフライブルクで初演されましたが、その後は2001年キール劇場の上演しかありません。また日本では、いままでシュレーカーのオペラは、どの作品も舞台上演されたことがありません。

クリストフォロス伝説

大男レプロブスは、強きものに仕えることを望み皇帝のもとに居たが、皇帝が悪魔を恐れたことから、悪魔に従って蛮行を重ねた。しかし隠者から奉仕することを諭されて、川を渡る人々を助けていた折に、一人の少年を背負ったところ川の中で際限なく重みが増してゆく。少年は自らがイエス・キリストであり、全世界の罪を背負っているため重いのだと明かし、レプロブスを祝福して、「キリストを背負ったもの」という意味の、クリストフォロスと名乗るよう命じた。

表題のとおり、このオペラはキリスト教の聖人伝説を念頭に置いている。しかし伝説自体は、オペラの筋書には組み込まれていない。シュレーカーは、聖人クリストフォロスを「同名の祖先」と呼んで強きものを希求する登場人物、クリストフの人物像に伝説を象徴させた。その対極をなす弱きものには、作曲学生のライバルであるアンゼラムをあて、強きものは凡庸、弱きものは才能豊かな人物と設定した。

あらすじ

プロローグの舞台は作曲教師ヨハンの音楽室。伝統的価値観を持つヨハンは学生たちに、聖クリストフォロス伝説を題材にした弦楽四重奏曲を書くという課題を与える。しかしシュレーカーの思想を代弁する気鋭の新進作曲家アンゼラムは、伝統的で純粋な音楽形式としての弦楽四重奏を拒み、同じ素材に拠るオペラを企てる。それは彼自身がオペラを書いているという筋立てである。この劇中劇にはアンゼラムとは対照的な、因習に捉われた作曲技法に甘んじる、凡庸な才能の同僚学生クリストフが登場する。

師ヨハンの娘でファミファタル的な性質をもつリーザは、作曲を断念して妻子への愛情に生きると宣言したク


リストフと結婚するが、アンゼラムとの恋心も鎮めることができず、第1幕2場でクリストフに射殺される。アンゼラムはクリストフの逃走を幫助し、二人はキャバレーに身を沈める。この第2幕でクリストフは、霊媒の口寄せでリーザの声を聴くうちに覚醒して、劇中劇の構想を超越し、象徴的な死という救済に邁進する。

長い間奏曲に続いてヨハンの音楽室に戻ったエピローグでは「男の力を知りつつ女の弱さに留まる者」たるべしと諭す老子の『道德教』の一節が響く。劇中劇が破綻してプロローグにおける作曲学生に戻ったアンゼラムは、オペラを諦め、やはり弦楽四重奏を作ると師のヨハンに伝えて、作品は幕を閉じる。

【お問い合わせ・チケット購入】一般社団法人カンタームス

〒173-0037 東京都板橋区小茂根2-30-12-501

TEL: 03-5926-3548, FAX: -3549, info@ivctokyo.com <https://ivctokyo.com/christophorus/>

 クリストフォロスで検索

主催：一般社団法人カンタームス、公演監督：田辺とおる

協力： 清瀬けやきホール、
ヤマハエレクトーンシティ、
アルコア出版（ドイツ）、
シュレーカー協会（米国）



後援：公益財団法人東京二期会、
日本アルバン・ベルク協会